

柳川郷土研究会
会誌「水郷」付録

すいきょう

瓦版

発行所 柳川郷土研究会
柳川市本城町 113-1

発行人 武松 豊

編集責任者 金子俊彦



土竜(もぐら)の囁き

名古屋に行けば、いろんなものに宗春の二字がくつつく。例えば“宗春うどん”。“宗春どんぶり”といった類である。また、のれんには温知政要の四字が現れる。これは、尾張藩七代藩主徳川宗春公に対する名古屋市民の敬愛の情が、いまだに奥深く残っている事を物語っているように。市民は、今の名古屋の繁栄は宗春公の温情と施策あつてのものだと思つている。江戸時代の藩公で、こんなにも慕われる殿も珍しい。公は三四歳の時やつと藩主の座につかれた。現在の福島県梁川三万石の殿である。そこでも限りなく藩民に慕われている。公の人間性の致すところであろう。

三五歳の時尾張藩主になられた。その時、家臣団に与えられた訓示の書が温知政要である。こんなに現代的な殿がおられたとは驚かされる。この名君が、儉約令違反者として將軍吉宗によつて酷い処罰を受けた。このことが、より名古屋市民に同情心をかき立たせているのだらう。今、政治の世界にいる者は温知政要の精神の一つも汲み取つていただきたいものである。
(土竜)

柳川郷土研究会
会誌「水郷」付録

すいきょう

瓦版

発行所 柳川郷土研究会
柳川市本城町113-1
発行人 武松 豊
編集責任者 金子俊彦



土竜(もぐら)の囁き

終戦の年、梅雨の頃大牟田市は米空軍による焼夷弾攻撃をうけた。中心部は一夜にして焼け野が原と化した。哀れは被害を受けた市民で親戚知人の無いものは焼け跡に丸く瓦を積んで焼けトタンを乗せて住まいとしていた。焼夷弾の破片が燃えながら飛んできて娘さんお母さん族であった。食べ物のため八方手を尽くし万策つぎると、遂に娘に因果を含めて家から出て行って娘が尋ねてきた。栄養不足で四年程度の体格、顔色は青白く栄養失調から一面吹き出ものがあつた。家長である兄は「気の毒だから置いてあげよう」といった。それから毎日が甘諸の食事、それでも彼女はめきめき顔色がよくなり縦も横もおおきくなつた。困つたのは着るもので、両親亡き二十歳前後の男手ではどうすることもできなかつた。冬になり、いつの間にか彼女は居なくなつた。存命ならば七三才くらいだと思ふが、その後どんな人生を送つたであろうか。幸福であれと念じつつ、一方では再びこんな酷い時代がこないことを祈っている。

(土竜)